
番外編

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編

【Zコード】

Z0781BA

【作者名】

時雨

【あらすじ】

SD試作の番外編を書いていきたいと思っております。捏造設定、オリキャラ有になると思いますので、そういう物がお嫌いな方はご注意ください。スケットダンスは新生徒会がメインになりますので、主人公の影は限りなく薄くなると思います。

番外編1（前書き）

希里の家族を捏造しております。

主人公は影も形もありません。

こちらに載せていいものかどうか悩んだ物ですが、それでも良い
ところ心の広い方に読んで頂けると嬉しいです。

今現在、希里の心を悩ませている物。

学年全員に配られたそのプリントの名前。それは、進路希望調査書であつた。

高校生の段階で自分の将来像がはつきりしている者はどれほどいるのだろうか？

勿論、椿の様に「チヒの様な立派な医者になる」という目標を持ち、日々精進努力している者もいる。だが、大抵の場合は自分の得意科目や学力に応じて、ほんやりと志望大学を決め始めるといったところだろう。

その点、希里の将来の夢ははつきりしているようだが、その夢を叶える手段は漠然としていた。

彼の夢は勿論、唯一無二の主である椿の為に己の存在を捧げる事にあるが、そのまま心の内を表す事が、大事な主の心を悩ませてしまつということは学習していた。自分の持ちうる力は矮小な物に過ぎないのであるから、思う様使いきっていただきたいのだが。それに実際問題として、自分の食いぶちは自分で稼がねばならない。世知辛い話ではある。

椿の役に立ち、なおかつ自分の食いぶちを稼ぐといつ命題が未だ解けない。

単純に考えるなら看護師だろう。最近は男性の看護師も増えている。だが、以前そのような話をした時、椿に尋ねられてしまった。「本当にそれがキリの将来の夢なのか？」と。

自分で言うのもなんだが、希里は人の役に立つ事が好きだ。困っている人を見かけたら、無条件で手を差し伸べる。そんな希里の姿を知る学園の生徒達は、希里の将来の夢が看護師だと聞いても納得するだろう。だが、椿の問いかけには真摯に応えるべきであると考える希里は、正直即答できかねた。まず椿ありきで選んだ職種だったのだから。即答しかねた段階で、椿から眞面目に自分の将来について考えるよう言い渡された。

そして冒頭に戻る。

希里の両親は共働きで、大手の警備保障会社に勤めている。父はただの警備員というわけではなく、秘匿性の高い業務に携わっているらしい。その仕事内容は教えられた事はないし、希望里から尋ねたこともない。母は女性専門のSPとして大変重宝されているらしい。加藤家の血筋からすれば妥当な職種だと思うし、以前の希里は漠然と自分もそういう仕事に就くものと思っていた。

だが、椿という主を戴いた今。

父の勤務状況からして、椿の役に立つという一番の命題は果たせそうにない。ならば別段その仕事に未練など感じない。これは、あくまでも優先順位の問題である。

そして今、希里は初めて眞面目に自分の将来を考え始めたともいえる。

今の己にできること。

勉学に関しては特に問題は無い。生徒会執行部の一員としての自覚を持ち、そして椿の傍に在り続ける為に日々努力を惜しまず取り組んでいる。希里が適当な大学の名前を調査書に書いて提出しても。学校は何も文句はつけないだろ？

忍術の方も日々鍛錬は積んでいる。一般の人間が思い描く様な体術は勿論だが、最近は祖父から、薬草についても以前より詳細に学び始めている。これは椿からの影響が大きい。

今まで希里は、祖父がどのような仕事をしていたのか聞いた事は無いが、最近、自分のとりとめもない話を聞いてくれている祖父の姿を見ていると、祖父にも自分にとつての椿の様な存在があつたのではないかと思っている。両親も忙しい仕事の合間をぬつて、自分に修行をつけてくれたが、実際の忍術の師は祖父である。

今度またゆっくりと祖父と話をしてみたいと思つ。

最近、のどに初期症状が出る風邪が流行つてゐる。体調管理は基本であるから充分気をつけているが、学校は一種の閉鎖空間である。ある程度の流行は抑えようがない。生徒会室にもノド飴が常備されるようになった。椿も喉に違和感があるのか、今日は喉元に手をやることが多い。

希里は、お茶請けを用意してから各人の好みの飲み物を用意し始める。普段は一階の自動販売機で買つてくるところだが、風邪の予防には緑茶が良いともいふし、ホットの緑茶も売つてはいるが、茶葉から淹れる方が効果がある気がして、最近は緑茶を淹れる事が多い。

紅茶を淹れるにはゴールデンルールがあると聞くが、緑茶も案外

淹れるのは難しいらしい。希里は祖父と過ごす事が多かつた為、自然と淹れ方は身についていたので自覚は無いが、舌の肥えている丹生にも褒められた程だ。普段はコーヒーを好む浅籬や子供舌の宇佐見も普通に飲んでいる。毒舌を吐かれない事から、まあ、嫌がられてはいないのだろうと判断している。嫌なら速攻でコーヒーを買以に走らせるような先輩だ。

女子3人に緑茶を淹れ、椿と自分には家から持参した祖父特製の薬草茶を淹れる。今風に言えばハーブティーか。隠し味にカリンエキスを一滴いれるのは自分のアイディアだ。喉越しが一層良くなるだろう。

応接セツトに場を映し、それぞれが希里に謝意を述べながら休憩をとる。今日もお茶の淹れ方は合格の様だ。

ただ、椿の表情だけが怪訝な感じになつていて。

「キリ、これは？」

「祖父が持たせてくれた薬草茶なのですが。風邪の予防に効くと申しておりましたので」

もしかして、会長は薬草の類はお嫌いだつたかと後悔する。勝手な独断で淹れる前にお伺いするべきであつた。

「いや、いつも緑茶ばかり飲んでいたが、これもなかなか美味しいものだな。特になんとか爽やかな様な…」

上手く言葉に言い表せないのか、もどかしげな椿の手元に視線が集まる。

「あら、会長のお茶はいつもと違いますのね？」の香りは…、カリンでしょうか？

「男だけでするい、と伝えてください」
「THZ（椿だけ臘眞はズルイ）」

「いや、今日は生憎少ししかなかったので。希望があるならまた明日持つてきますが、それにしてもカリンの香りがきついですか？」
「いえ、注意すれば気付くといったところですけど」「カリンというのか。名前は知っていたが美味しい物なのだな」

カリンを加えたのは自分のアイデアだったので安心する。

「そちらで売つてらっしゃるのかしら」
「いえ、自分の祖父の手製です。すみません。独断で得体の知れない物をお出ししてしまいました」
「いや、これは美味しいぞ。是非お礼を伝えておいてくれないか」「私も飲んでみたい」
「私も飲みたいです、と伝えて下さい。//モリン先輩」「喉がすつきりした気がする」「本当に香りだけでもスッキリした感じがしますわ」

予想外の高評価に表情が緩みそうになる。

「キリのお祖父さんは薬草に造詣が深いのか？」
「そうですね、忍の術の一環としても教えられましたが、最近は健康に良い薬草の栽培に力をいれていますね」
「漢方も奥が深いからな」

やはり、医師希望の会長としては興味の惹かれる分野なのだろう。それからしばし、漢方やハーブの話で盛り上がる。女子もハーブとなれば、皆結構な知識を有しているらしく思いの外楽しい時間となつた。

「本当に今日は美味しい物を御馳走になつた」

「いえ、自家製のもので失礼しました。会長のお気に召したのなら何よりです」

「いつか機会があつたら、お話を伺いしたいものだ」

会長に喜んでいただけたのは嬉しい事だが、自分の手製でないことが残念だった。調合についても語つてはいるが、まだまだ人に出せるレベルではない。

ただ庭に生えている薬草を干して混ぜるだけだと思っていたが、今度からしつかり教授してもらおう。

おかげが無い事に少し残念そうな会長に、緑茶を新しく淹れて差し上げつつ希望は思った。

会長の御自宅への道のりをいつものように一人で歩く。最初の頃は、落ち着かない様な居心地の悪い様な感じが漂つていたけれど、最近は普通に会話を交わしながら共に歩む。横に並ばせていただくなど、今度は自分が落ち着かないが、会長の表情が窺えるのは嬉しい。

「本当に今日は美味しい物を御馳走してもらつた。忍の術には薬草の知識を必要とするものもあるのか?」

「そうですね、傷や打ち身に効く物や、解熱効果・解毒効果のある物など知つていて損はありませんし」

「本当にたいしたものだな」

他にも暗殺用の毒草の知識も教えられているが。純粹に感心して

おられる会長にそこまでは告げない。それにしても自分では当たり前な事と思っていた事に、ここまで4感心4していただけたとは思つてもいなかつた。

何故か今なら夢の尻尾が捕まえられそうな気がする。

「会長、答えが分かつた気がします」

俺の唐突な発言に、きょとんとしていらっしゃる会長の表情は稚い。おそらく御自分のなされた問い合わせの答えの事だとは気が付いておられないだろうけれど。

だけど、嬉しそうに一緒に喜んで「良かつたな」と自分の肩に手を置く会長の姿を見ていると、この人に出合えた歓びが再び胸に満ち溢れる。

これからもずっと、この人と共に歩んでいこうと決意を新たにした。

番外編 1（後書き）

いざればリボーンキャラとも絡めた話が書いてみたいですが精進あるのみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0781ba/>

番外編

2012年1月1日21時46分発行